川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2016年

12月9日

物議を醸すトランプ政権の閣僚人事

トランプ次期大統領は、国防長官に元海兵隊将軍のジェームス・マティスを指名した。マティスは 2003 年のイラク侵攻の際海兵隊部隊を率いて功績を挙げのちに中央軍司令官にまで上り詰めた、海兵隊きってのエリートである。そのマティスが国防総省の頂点に立つというのだから、海兵隊にとってはかつてピーター・ペイスが統合参謀本部議長に就任したときの衝撃を超える快挙だろう。ただ、国防長官に就任するには退役してから 7 年間を経なければならない。その点が問題となっており簡単にはいかないだろう。

トンランプの閣僚人事は国防長官だけでなく、多くの指名でワシントンでは物議を醸し出している。その一つが国家安全保障担当補佐官という、外交と安全保障政策に最も大きな影響力を持つ地位にマイケル・フリンを指名したことである。DIA 長官を務め DNI の補佐官も務めた情報分野に詳しいフリンもまた退役軍人である。トランプは軍人を多用することで好戦的だとの懸念もあるが、フリンの起用についてはもっと危機感を持つ人々がいる。

彼らはトランプ次期大統領に対して「フリンの起用は国家の安全保障のみならず世界にとっても危険極まりない」との書簡を送ったのである。彼らとはアメリカのリベラル系組織、キリスト教団体、反戦団体、ユダヤ系団体などで、多くの組織がその書簡に名を連ねている。

彼らの懸念はマイケル・フリンがイスラム教を敵視した発言をするなど強硬派の姿勢を打ち出していることにある。だがそれよりも彼らがもっとも注目している点は実はフリンはマイケル・リーディンという人物と大変親しいということだ。リーディンは生粋のネオコンである。かつてブッシュ政権時代に国防次官を務めたばりばりのネオコンのダグラス・ファイスのアドバイザーを務めていた。さらに同じくネオコンのカール・ローブのアドバイザーでもあった。２００３年、ブッシュ政権がイラク侵攻へと邁進する中、フセインとアルカイダがつながりがあるという主張を強硬に行い、イラク侵攻を実現しようと画策していたのがリーディンだった。

ブッシュ政権時代はこのように強硬なネオコンが政権に入り込んで、イラク戦争へと突っ走りその結果アメリカは疲弊していった。ワシントン政治に素人のトランプ政権にネオコンが再び入り込み、アメリカの外交政策を自在に操る可能性もある。今回の書簡に名を連ねた人々は過去の再現を恐れて異例とも言える行動を採ったのである。

トランプ閣僚人事では肝心の国務長官の指名がまだである。国務長官が誰になるのかでトランプ政権の方向性が明らかになる。元ニューヨーク市長のジュリアーニ、そ

れに元 CIA 長官のペトレイヤスに加え、前回の大統領選挙でオバマと争った中道よりのロムニー、上院外交委員会委員長が今のところ有力な候補とされている。物議を醸し出すサプライズ人事がまた飛び出すかもしれない

12月17日

異色で強面の交渉人が国務長官に指名

トランプ次期大統領は意表を突いて話題をさらうのが上手である。外交の要である国務長官に誰を指名するのか、アメリカのみならず世界中が候補者を列挙して待っていた。候補のリストにあったのは、ミット・ロムニー、ジュリアーニ、ペトレイアスなどそれなりにありそうな名前だった。

だが、既存のものに縛られないトランプは、国務長官には石油メジャーのエクソン社の CEO であるレックス・テラーソンを指名して世界中をあっと言わせた。全く話題にもならなかったテラーソンの指名に「商売人に外交ができるのか」という怒りにも似た反発がワシントンでは渦巻いている。しかもテラーソンはロシアにきわめて近い。

「ウクライナ紛争でロシアへの経済制裁に反対し、プーチンとも親しいテラーソンはアメリカの国益と相反する」と上院議員のマケインはさっそく噛みついている。上院での指名公聴会は荒れそうである。

しかしトランプの意図はあながち無茶ではない。それはテラーソンのキャリアを見ると見えてくる。中には「案外いいかも」と期待する元外交官もいるほどだ。

1952 年テキサス生まれのテラーソンは現在 64 歳。23 歳でエンジニアとしてエクソンに入社して以来エクソンに勤め、1995 年 43 歳でイエメン支社の社長、1998 年にはロシアのエクソン支社であるネフトガス社の社長に就任した。2006 年に 53 歳の若さでエクソン・モビル社の CEO の座についた。石油が国のエネルギー政策の中心であり外交のツールとして有効だった時代にテラーソンはその最前線にいたことになる。しかも石油ビジネスは中東を中心に展開する。当然ながら中東諸国の指導者らとのタフな交渉をしなければならない。

そしてロシアではさらにタフで強面の交渉人であるプーチンとも渡り合わなくてはならない。プーチンとサシで会談した回数はおそらくどこの国の指導者よりも多いというくらいだ。その成果があってエクソンはロシアでの就業が実現し、テラーソンはプーチンからの信頼も厚い。テラーソンがプーチンと同じくらいにタフで強面であるという証左だ。

人生を石油ビジネスにかけて文字通り世界を舞台に活躍してきたテラーソンの経験がシビアな外交交渉に十二分に発揮されれば、アメリカの外交がスマートに展開するかもしれない。ロシアと親密になることは決して悪いことではない。シリア内戦を始め多くの紛争が解決に向けて進む可能性は高まる。トランプ政権の外交に注目したい。